
平成30年度 教育課程説明会道德部会

奈良県教育委員会事務局
学校教育課 指導主事 丹下 博幸
MAIL tange-hiroyuki@office.pref.nara.lg.jp

道徳科の目標について

- (1) 道徳科の目標
- (2) 道徳的諸価値についての理解を基に
- (3) 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める
- (4) 道徳科で養うものと明確にされた道徳性

(1) 道徳科の目標

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

(中学校学習指導要領 P154)

道徳性を養うための学習の過程

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習

道徳科の目標について

(2) 道徳的諸価値についての理解を基に

- ・ 道徳的価値について理解するとは、発達段階に応じて多様に考えられるが、一般的には、道徳的価値の意味を捉えること、またその意味を明確にしていくことである。

価値理解... 内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること

人間理解... 道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること

他者理解... 道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解すること

他教科等の「知識・技能」とは異なり、知識として理解すること自体が目的ではなく、理解を深めて道徳性を養うことが目標であることを示している。価値の理解は、客観的、観念的に理解することではなく、自分のこととして考え、自分の生き方の手掛かりとして理解を深めていくということ。

道徳科の目標について

- (3) 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める

道徳科の学習を進めるに当たっては、その特質を踏まえて、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方について考えを深める学習に意を用いる必要がある。ただし、こうした諸側面は、道徳科における一連の学習過程として形式的・固定的に捉えられるべきものではない。要は、道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践につなげていくことができるようにその学習内容や方法を構想していくことが求められる。

道徳科の目標について

○ 「自己を見つめる」とは

- 自分の問題として考えること。
- 自分であれば、どのような気持ちになるか、どのように考えるか、どのようにしようと思うかなど、当事者になったつもりで心の内を考えながら授業を受けること。
- 他人事として評論することではない。また、「自分ならどうするか」というように「行動」を問うことに終始するわけではない。

○ 「物事を多面的・多角的に考える」とは

- ものの見方や考え方は人によって異なるものであり、道徳上のことは唯一絶対的な正解があるわけではない。
- 友達の意見をよく聞き、自分の考えを語ること。
- 授業者としては、生徒たちの意見をよく聴き、対話のある（意見の交流がある）授業をするということ。

○ 「人間としての生き方についての考えを深める」とは

- 授業で新しく獲得した価値理解（広がったり、深まったりした）を基に、人間としてのよりよい自分の生き方について考えること。

道徳科の目標について

(4) 道徳科で養うものと明確にされた道徳性

道徳性

道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養うことを求めている。これらの道徳性の諸様相は、それぞれが独立した特性ではなく、相互に深く関連しながら全体を構成しているものである。したがって、これらの諸様相が全体として密接な関連をもつように指導することが大切である。道徳科においては、これらの諸様相について調和を保ちながら、計画的、発展的に指導することが重要である。

道徳性を構成する諸様相

道徳的判断力

道徳的心情

道徳的実践意欲と態度

道徳性を構成する諸様相は、それぞれ独立したものではなく、相互に関連し合い、切り分けられるものではない。

内面的資質である道徳性の諸様相は、連携し合っており、道徳的行為を行うに当たっては、いずれも欠かせないもの。

道徳科においては、内面的資質である道徳性を養う。

道徳科の指導について

(4) 道徳科で養うものと明確にされた道徳性

- 道徳性の諸様相に、序列や段階があるわけではない。
- 一人一人の生徒が道徳的価値を自覚し、人間としての生き方について深く考え、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。
- 道徳科においては、その目標を十分に理解して教員の一方的な押し付けや単なる生活経験の話合いなどに終始することのないように留意すること。
- 長期的展望と綿密な計画に基づいた丹念な指導がなされ、道徳的実践につなげていくことができるようにすることが求められる。

2 道徳科の内容

- (1) 内容の捉え方
- (2) 視点及び各視点内の内容項目の順序の入れ替え
- (3) 内容項目を端的に表す言葉の付記
- (4) 発達の段階を踏まえた内容項目の構成の見直し

(1) 内容の捉え方

学習指導要領「第3章 特別の教科 道徳」の「第2 内容」は、教師と生徒が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。

(中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 P19)

- 学習指導要領第3章の「第2 内容」で示されている各項目を「内容項目」という。
- 内容項目は、道徳科だけでなく全教育活動において、指導されなければならない。
- 指導に当たっては、内容を端的に表す言葉そのものを教え込んだり、知的な理解にのみとどまる指導になったりすることがないように十分留意する必要がある。

2 道徳科の内容

(2) 視点及び各視点内の内容項目の順序の入れ替え

視点の入れ替え（上:これまでの視点 下：今回の改訂による視点）

- 1 主として自分自身に関する事
- 2 主として他の人とのかかわりに関する事
- 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関する事
- 4 主として集団や社会とのかかわりに関する事



- A 主として自分自身に関する事
- B 主として人との関わりに関する事
- C 主として集団や社会との関わりに関する事
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事

各視点における最初の内容項目

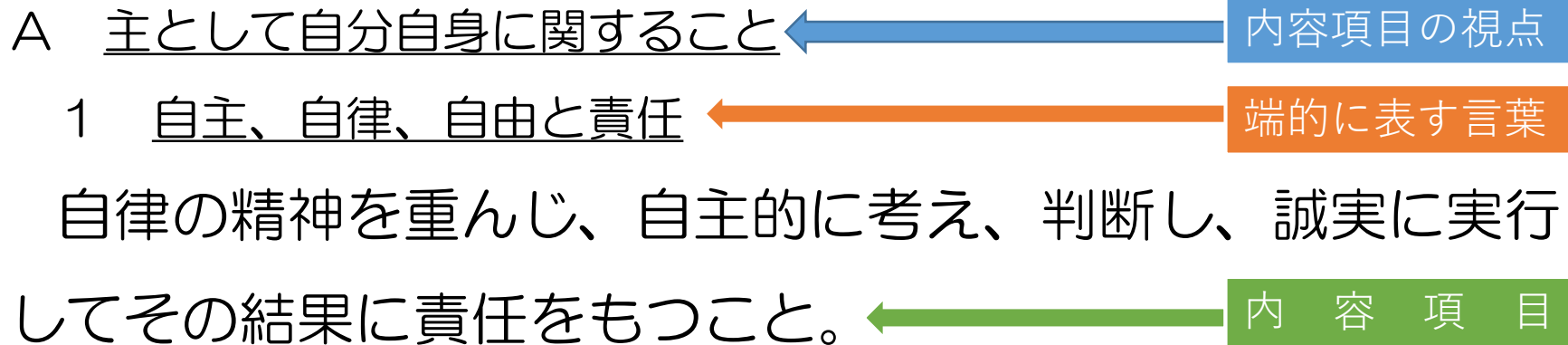
- A 「自主、自律、自由と責任」
- B 「思いやり、感謝」
- C 「遵法精神、公德心」
- D 「生命の尊さ」

2 道徳科の内容

(3) 内容項目を端的に表す言葉の付記

- 道徳教育の内容項目を共有しやすいものとし、保護者や地域の方々との連携を深める
- 内容項目を概観できるようにし、その全体像を把握しやすくする
- 内容項目は、生徒自らが道徳性を養うための手掛かりとなるもの

内容項目＝ 教師と生徒が人間としてのよりよい生き方を求め、ともに考え、ともに語り合い、実行に努めるための共通の課題



2 道徳科の内容

(4) 発達段階を踏まえた内容項目の構成の見直し

- 小学校から中学校までのつながりを明らかにし内容の体系性を高め、児童生徒の発達の様子を踏まえ、ねらいをより明確にした指導を可能にするため。
- 生徒を指導するに当たっては、発達段階を前提としつつも、指導内容や指導方法を考える上では、生徒の実態を踏まえ、個々人としての特性等から捉えられる個人差に配慮することが大切である。

2 道徳科の内容

中学校の内容項目と小学校の内容項目の関係

中学校の内容項目

1 自主、自律、自由と責任

自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。

小学校の内容項目

〔善悪の判断、自律、自由と責任〕

〔第1学年及び第2学年〕

よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うこと。

〔第3学年及び第4学年〕

正しいと判断したことは、自信もって行うこと。

〔第5学年及び第6学年〕

自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。

〔正直、誠実〕

〔第1学年及び第2学年〕

うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活すること。

〔第3学年及び第4学年〕

過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること。

〔第5学年及び第6学年〕

誠実に、明るい心で生活すること。

道徳科の指導について

- (1) 道徳教育を推進するための指導体制の整備
- (2) 指導方法の工夫
- (3) 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

(1) 道徳教育を推進するための指導体制の整備

- 校長の方針に基づき、道徳教育推進教師を中心に全教職員の共通理解を図り、組織的に取り組むこと。
- 道徳科の指導は、学級担任の教員が行うことを原則とするが、年に数回、教員が交代で全学級を回って道徳の授業を行うといった取組も効果的である。
- 現代的な課題を取り扱う授業においては、担当する教科の専門性を生かして学年の全学級を回って道徳の授業を行うことも考えられる。

道徳科の指導について

(2) 指導方法の工夫

- 「道徳的諸価値の理解」と「人間としての生き方についての考え」とを相互に関連させながら深められるよう創意工夫し、多様な指導方法を取り入れ活用する。
- 道徳科における問題解決的な学習や道徳的な行為に関する体験的な学習等を取り入れたり、特別活動等の多様な実践活動や体験活動を生かしたりすることが考えられる。
- 生徒同士で話し合う問題解決的な学習を行うに当たっては、そこで何らかの合意を形成することが目的ではなく、将来、道徳的な選択や判断が求められる問題に対峙したときに、自分にとっても他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質・能力を育てることにつなげることが大切である。

道徳科の指導について

(2) 指導方法の工夫

多様な教材を活用した創意工夫ある指導

- 道徳科は、主たる教材として教科用図書を使用しなければならない。
- 道徳教育の特性から、各地域に根ざした地域教材など、多様な教材を併せて活用することが重要となる。

- (2)教材については、教育基本法や学校教育法その他の法令に従い、次の観点に照らし適切と判断されるものであること。
- (ア)生徒の発達の段階に即し、ねらいを達成するのにふさわしいものであること。
- (イ)人間尊重の精神にかなうものであって、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題も含め、生徒が深く考えることができ、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものであること。
- (ウ)多様な見方や考え方のできる事柄を取り扱う場合には、特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないものであること。

(中学校学習指導要領 P158)

「学校における補助教材の適正な取扱いについて」(平成27年3月4日付け初等中等教育局長通知)など、関係する法規等の趣旨を十分に理解した上で、適切に使用することが重要です。

道徳科の指導について

(3)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「主体的な学び」の視点から

- 生徒が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫する。
- 年度当初に自分の有様やよりよく生きるための課題を考え、課題や目標を捉える学習を行ったり、学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に集積（ポートフォリオ）したりすることにより、学習状況を自ら把握し振り返ることができるようにすることなどが考えられる

道徳科の指導について

(3)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「対話的な学び」の視点から

- 生徒同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりする。
- 日頃から何でも言い合え、多様な意見を認め合える学級の雰囲気をつくることが重要である。
- 資料を通じて先人の考えに触れて道徳的価値の理解を深めたり、自己を見つめる学習につなげたりすることができるような教材の開発・活用を行うことや様々な専門家や保護者、地域住民等に道徳科の授業への参加を得ることなども効果的な方法である。
- 言葉により伝えるだけでなく、多様な表現を認めることも大切である。

道徳科の指導について

(3)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「深い学び」の視点から

- 様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とする。
- 道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探究する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え方、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫する。

道徳科の指導について

(3)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「深い学び」の視点から

・道徳的な問題場面には、

- ㊦道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題、
- ㊧道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題、
- ㊨道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでできない自分との葛藤から生じる問題、
- ㊩複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題

などがあり、これらの問題構造を踏まえた場面設定や学習活動の工夫を行うことも大切である。

道徳科の指導について

(3) 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

深い学びにつながる指導方法の例

- 読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習
教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めること。
- 様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決する学習
生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問を通して、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせること。
- 道徳的行為に関する体験的な学習
役割演技などの疑似体験的な活動を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うこと。

道徳科の評価

- (1) 道徳科の評価の基本的な考え方
- (2) 生徒の学習状況を見取るための二つの視点の例
- (3) 道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例
- (4) 評価するに当たっての配慮

(1) 道徳科の評価の基本的な考え方

生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

(中学校学習指導要領 P158)

道徳科の評価について

(1) 道徳科の評価の基本的な考え方

- 数値による評価ではなく、認め、励ます個人内評価として記述式で評価すること。
- 個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
- 他の生徒との比較による評価ではなく、生徒一人一人の成長に着目し、よい点や可能性、進歩の状況を積極的に受け止めて認め、励ますことが求められること。
- 学習活動により生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。
- 調査書に記載せず、高等学校等の入学者選抜の合否判定に活用することのないように留意すること。

道徳科の評価について

(2) 生徒の学習状況を見取るための二つの視点の例

① 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうかを見取る視点の例

- 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。
- 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。
- 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を広い視野から多面的・多角的に考えようとしている。 など

② 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうかに関する視点の例

- 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。
- 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる。
- 道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている。
- 道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。 など

道徳科の評価について

(2) 生徒の学習状況を見取るための二つの視点の例

道徳科の学習状況（学びの姿）の例

- 道徳的価値のよさや大切さについて考えようとしている。
- 道徳的価値について、一つの見方ではなく様々な角度から捉えて考えようとしている。
- 道徳的価値について、自分のこれまでの体験から感じたことを重ねて考えようとしている。
- 授業で学んだ道徳的価値のよさを感じ、これからの自分の生き方に生かそうとしている。 など

道徳科の評価について

(3) 道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例

- ア 学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、人間としての生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。
- イ 発問は、生徒が広い視野から多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
- ウ 生徒の発言を傾聴して受け止め、発問に対する生徒の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。
- エ 自分自身との関わりで、物事を広い視野から多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
- オ ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、生徒の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。
- カ 特に配慮を要する生徒に適切に対応していたか。

道徳科の評価について

(3) 道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例

道徳科の指導に生かす具体的な多面的・多角的な見方の例

- ねらいとする道徳的価値の様々な面を考える。
- 道徳的価値を支える様々な根拠を考える。
- 様々な登場人物の立場で考える。
- 焦点を絞って考えたり、視野を広げて考えたりする。
- 時間の経過とともに変化する気持ちを考える。
- 人間の強さや弱さなどを捉えて考える。 など

道徳科の指導に生かす自分自身との関わりの中で深めている例

- 教材の登場人物に自分を置き換えて考える。
- 教材の問題点等を自分事として受け止めて考える。
- 日常生活や学校生活等を想起しながら考える。
- 自分の生活を見つめ、振り返りながら考える。
- 自分だったらどうするかなど考える。 など

道徳科の評価について

(4) 評価するに当たっての配慮

- 発言が苦手だったり、文章で書くことが苦手だったりする生徒に対する配慮。
- ティームティーチングによる授業の実施など、学年全体で組織的に取り組むこと。
- 年に数回、教員が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行うといった工夫した取組の導入。
- 道徳科の学習活動における生徒の具体的な取組状況を、年間や学期といった一定のまとまりの中で、生徒が学習の見通しを立てたり学習を振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ること。 など

道徳科の授業で大切にしていきたいこと

道徳教育と道徳科のつながりを明らかにした指導

道徳科の特質を踏まえた指導

道徳科のねらいを踏まえ、道徳科の授業で、生徒に何について考えさせ、何に気付かせたいのかを明確にもつこと。

指導過程や指導方法、教材・教具等の工夫は、目的ではなく手段であることを認識すること。